幼児の造形教育のポイントは何か

林　健造

1　急がばまわれ

今朝、新聞をひらいていますと、小学校の教育改訂の中間発表がでていました。今まであまり詰め込みをやりましたので、もう詰め込みはやめようということが書いてありました。とてもよいことだと思います。やはり少し教育がおかしくなると序々に直すようになっているようです。

幼稚園の場合でも何かソワソワと急いでいるのではありませんか。そういうことを先生方でいらっしゃるみなさんは、ひしひしと感じることでしょう。私は、今、茗荷谷という所で電車を降りて歩いてきたのですが、電車から降りますと急がなくてもいいのに、みんなにつられてソワソワと急いでしまうのです。こういうことが教育の中にもあります。人間というものは非常にゆっくり育てられるように頭のしくみができているらしいのです。下等な動物になる程たいへん成長が早いらしい。調べてみると京燕（フライキャッチャー）という鳥が卵から出ますと、目の前をすうっと飛びかう虫をぱっとついばむというのです。これが一番早いらしい。人間の場合はひどくゆっくりしたものです。

みなさんも四、五歳の子どもを取り扱っている方々ですからよく知っていらっしゃるでしょうが、五歳くらいになっても、転ぶと危いよ、かけちゃだめよ、かけると転ぶから、なんて、頼りないものです。馬だったらどうでしょう。競走馬はふつう二歳から三歳でしょう。五歳くらいだったらおじいさんになっているのではないでしょうか。人間の場合はその上に積み重ねる成人への過程に非常に高等な組み立てがあるわけです。だから土台はしっかりやりなさいということなのですね。幼児の教育はゆっくりやれば、やるほどよいといわれています。何かソワソワと急いでいるというのは、せっかく神さまがそのようにつくって下さったのに

一番下等な動物に近づけようと育てているような気がします。

2　全体保育の中の絵画製作

絵画製作というのは何かポツンと考えて芸術だから特殊なものだというような考え方ではなくて、やはり、他の領域と深いつながりをもった教育の中のひとつの役割をもつものだというお話をしましょう。

よく聞くことですが、お母さま方の中には、「うちの子は、先生、絵が下手でしょ」なんて喜んでいう方がいます。「やっぱり先生、親が親でございますから」なんて……。製作といえば「製作はいいんです。うちの子どうせ大工さんにするわけではないのですから」そしてやたらに、読み、書き、そろばんではありませんが、国語、算数のようなものには目の色を変えています。これが国語なら、「だめでしょ、先生、家の子、全然国語だめなんです。何しろ親が親でございますから」などということは絶対にいわないのです。そういうところはやはり全体として考える必要があると思います。

私はよく話に引きますけれど、奈良女子大学の数学の先生でいらっしゃる岡潔先生はとても鋭い教育批判をなさっています。われわれが心の底からなるほどなあと思わせられるところが随分あります。馬鹿のひとつ覚えみたいに私は例の渋柿の接ぎ木のことをやっぱり考えているのです。甘柿というおいしい柿は渋柿の台木の上に甘柿を接ぎ木するのだそうです。教育というものもやはり同じで、動物性という台木の上に人間性を接ぎ木していくのです。そうでないと本当の教育にはなりません。ところが最近は、渋柿の上にまた渋柿を接ぎ木しているような気がするというのです。今の教育は動物性の上にまた動物性を接ぎ木しているのではないか。そのことがとても心配だというのです。

ですから幼児の教育でも人間性を接ぎ木するというところがとてもだいじなのです。いつかテレビで原宿族とかいう若い人たちとお母さま方との討論会を聞いていてたいへんおどろきました。あの人たちは自分のお母さま方ぐらいの人たちを相手にほとんど人間らしい話し合いをしておりません。「なんだよー」なんてよたっています。お母さまたちはびっくりして「だってまじめであるっていうことは大事なことではありませんか」などと必死でした。動物性の上に動物性が接ぎ木された結果なのでしょうね。つまりこういうところが一番大切な所でしょう。

幼稚園の子どもといえば、だいたい非常に動物性の旺盛な頃です。その旺盛な動物性をたくましく生かしながら、一方ではある方向をちゃんとみきわめて人間性の接ぎ木をしようとしているところに教育というものがあるのです。そしてやはり絵画製作の指導の場合にもそういうことを目ざさないものであるなら、全く無意味なものです。なんとか人間らしい心、人間らしい考え方をのばしていきたい。だから基本的に子どもに好きなように絵を描か

せ、好きなようにつくらせるということはたいへんいいことです。けれどでたらめでは駄目です。「あのね、みんな、きょうお絵かきしましょ。好きなようにかいてね。その間に先生お金勘定しているから」こんなことでどうして人間性がのびましょう。そういうすきなようにの放任なら動物性がのびるだけでしょう。

3　絵画製作の本質

私は、実際に子どもを教えてみて、いつでも感じていることの一つに、粘土でつくるとかクレヨンで絵を描くとかいう時に、時々ふっとこれは一体どういう意味があるのだろうかと思います。一体に絵画製作の目標は、きわめて簡単に考えられがちです。どうしてかというと、何かさせることをまずかいて、その後に創造力を養うと書けばだいたい目標になってしまうというやり方をとっているからです。たとえば粘土で好きなものをつくらせ創造力を養う。もっともらしくなりますが、これではたよりないものですね。粘土は大昔の人は身近にありました。そしていろいろと頭を働かせ、こうすれば土器ができるのではないかなあなどと考えてあのようなものを作り出しました。ところが私たちのまわりには今粘土などというものが環境にはありません。みなさんは教材屋から粘土を買って、それでもなおかつ粘土をしなければならないなんて、一体どういうことなのだろう？　今日私たちのまわりにあるのはコンクリートとプラスチックではないのかなあと思ったりするでしょう。そうすると自分の指導していることはどういうことになっているのだろうなどと、ふとむなしさを感ずることがあるのではないでしょうか。

われわれの祖先が長い歴史の中で築き上げてきた造形のやり方を受け継がなければならない。受け継ぐだけではだめで新しいものをつくり出していかねばならない。そういう一貫されたものと、私たちがやっている粘土で物をつくるとかクレヨンで絵を描くとかいう仕事は、みんなつながっているのです。つくりながら人間の知恵や人間の心を学んでいるのです。

ところでみなさん、幼稚園の子どもたちが、よくみなさんの手につながりたがるでしょう。でも先生の手は二本しかありませんから、せいぜい多くて四人ぐらいしかつなげないでしょう。両手に三人ぐらいずつつながったあとのはみだした子どもたちはどうしているかというと、つながった人にまたつながって先生の電波が伝わってくるというようなつもりでいます。つながっているだけで安心なのです。そういうものが本当は絵画製作の活動の中にもあるはずです。そこで岡先生がいっていらっしゃる人間性というのはどういうものなのか、どういう特質があるのだろうかということを考えてみなければならないわけです。

4　人間性とは何か

私はいろいろな物を読んだり聞いたりしてなるほどと思ったこ

とがたくさんあります。人間はもともと猿みたいなものだったのですね。猿から分かれたのです。猿はまだ木の上にのこっているのに人間の祖先は木から降りたのです。そして平野に暮らすようになって二本足で歩くようになりました。この二本足で歩くという特徴はたいへんなことではないでしょうか。完全にいつでも二本足で歩いているという動物は人間しかないそうです。ゴリラは二本で歩くではないかといってもやはり四つんばいになります。猿だって歩きますし、私の家の犬だってちんちんをします。けれどいざ逃げるとなると必ず四つ足で逃げてしまいます。

「アベロンの野生児」という本を皆さんお読みになったことがあるでしょう。アベロンの野生児は、四歳ぐらいでどこか野原にほうり出された子どもが、十二歳ぐらいで猟師にとらえられたのです。その子をなんとか人間にしようと思って、一生懸命だいじに育てているのですが、やっぱりいつでも逃げ出そうとばかりしています。一度野生の育ち方をした者は、なかなか人間になりません。そして逃げ出す時は四つ足で逃げだそうとします。こわいものです。人間だって狼になってしまうのです。そういう意味でも二本足で立つということは、人間にとってたいへんなことなのです。だいたい赤ちゃんの時には立てません。立つのにずいぶん苦労します。ひっくり返ったり、はいはいしたり、ようやく立ちあがって力んでみたりして、一歩くらい踏み出してみてまたひっくり返ったりしています。あれは大変なことなのです。頭が重いのです。考えてみれば皿まわしの曲芸みたいなものです。こんなに大きな頭を背骨で支えているのですからなかなか立てないのです。それがようやく立つようになり、二本足で歩いているというのですから相当なものです。二本足で立つと前足に用がないわけです。手があいたのです。それで手でいろいろなものを作りだすことを考え出したわけなのです。作っていくということは頭が発達するという見方もありますし、頭が発達しているから手で物を作るようになったのだという人もあります。要するに手を動かすことと頭の発達とは非常に密接な関係があったのでしょう。

人間という特質の中で一番だいじなことはつくるという喜びを知っていることだといわれています。人間がいろいろなものを生産していくこともみんな手の仕事です。それに手をみてみるとこれがまた他の動物と違うのです。生後十二日位の赤ん坊に何か棒切れをつかませるとにぎって絶対に離さない。その棒をもち上げると赤ん坊までぶらさがってくるというつかむ反射活動についての実験があります。ぎゅっとにぎるという力は不安感とつながるだろう。その不安というものが人間のいろいろな物を生み出していくものとつながっていくのだろうといっている人もあります。要するにつかむということができることは、たいへんな特質です。おまけに人間の親指は他の四本の指と対向しているのです。これを親指対向性というのです。ゴリラやチンパンジーもそうではないかと思われますがこの対向性はないのです。そうすると親

指と四本がむきあった使い方ができるというのは本当に人間だけしかいません。

クレヨンで描いたり、粘土をねったりしているということはこの親指対向性があるためにとても上手に物が作れたり、絵が描けたりするということになります。ですから手の訓練も大切だなということがわかるわけです。古い美術教育の目標には絵や物をつくる目的の中に手を訓練すると書いてあります。手の訓練だけではだめですが、確かにだいじなことです。ただいろいろな物をつくるということでしたら、みなさんは人間よりすばらしい生物がたくさんいることに気がつくでしょう。有名なことばに「蜂はすばらしい建築家であり、くもはすばらしい裁縫師である」というのがあります。朝早くおきてみますとくもがせっせと糸をかけています。本当にすばらしいものです。ところが人間には彼らがどうしても及びもつかない行為があります。それは「土器の行為」という言葉でいわれている行為です。「土器の行為」というのは土器をつくるときに人間はすぐにつくらないだろう。つくる前に形が頭の中に浮かぶだろうということです。人間はつくる前にそれを想像することができるということです。みなさんは洋服などつくる時に、最初からすぐつくるのでなく頭の中でどういう形にしようかと考えるでしょう。家をつくる時も同じです。そういうことをいろいろ考えてみると、想像ということは人間と他の動物を区別する最も大切な点だということができます。そのように人間の特質をいろいろ考えてみると、たいへんおもしろいものです。

5　脳の発達と幼児教育

この間、国立教育会館で脳の学者である時実利彦先生のお話を聞きましたが、私は教えられるところが多くて、こういう幸せは自分一人だけにしておく必要はないので、みなさんにも少しおわけいたしましょう。先生のお話からいろいろなことを考えてみたのですが、絵画製作というのは人まねをしないで創意をだいじにする仕事ですが、困った時にはやはり人に聞いたり見たりしなければなりません。私がなぜ時実先生のお話を聞くようになったのかといいますと、それを教えてくれた人が〝ノンちゃん雲にのる〟の石井桃子さんです。石井さんがいうには三歳の子どもにいろいろなお話を読んで聞かせてあげてもどうもわからないところがある。たとえば「よし子さんはおつかいにいきました。はじめお菓子屋さんにいってお菓子を買ってそれから果物屋さんにいって果物を買って、それから魚屋さんにいって、あ、そうだ魚も買わなければ、と思う。(そこまではいい)なぜかというと三日前にこういうことがあったのです。」というところにくると、子どもたちはつまらなそうな顔をしている、それがなぜかわからなかったというのです。それが時実先生のお話を聞いたらたちまちわかりました。三歳の頃には時間の概念がまだわからない。後もどりするということがわからない。きょう、きのう、あすの区別がつかな

い。ですから、三日前とひっくり返るともうわからなくなってしまう。だから興味がないということになるのです。

三歳と五歳の子どもに「パパ、明日の日曜日に上野の動物園につれていくからね」などと約束しておいて次の日になって用事ができてつれていけなくなった場合に、三歳の子どもにはあめ玉でもひとつ与えておくとけろっとしています。明日というものはどういうことになっているのかさっぱりわからない。けれど五歳の子どもは「パパどうしてつれていってくれないのよお」などとなかなかだましが効きません。小学校の先生が一年生や二年生に時間のことを教えるのは一番大変なのです。昼の十二時や夜の十二時とか、あさってなどというのは一番むずかしいのです。本当によく時がわかるのは十歳くらいだそうです。そういうわけで時実先生のお話を聞くことにしたのです。私は時々人におそわったり聞いたりして、なるほどそれでは同じことをやってみようかな、などといってずいぶんためになったことがあります。

きょうは地方の方も多いと思いますが、私はよく「君はいいな東京にいて刺激が多くて」などといわれます。地方だって刺激がないわけではないのです。ただ何かを求めている時には、ちょっとしたことが刺激になるのです。刺激とはむしろ外にあるよりも自分の心にあるのです。何もジャズが流れていたり、自動車がガーガー通っているのが刺激ではないのです。話は余談になりますが、よく絵を描かない子をどうするのですかと質問されます。その場合、どうしても描かない子を何とか描かせてあげようと考えます。私もそういう子にぶつかりまして、「ねえ先生と一緒にかきましょうね」などというと、「いや、先生描いてよ」なんていいます。けろっとしてなかなか描こうとしません。

ローマのミス・ショーといえばフィンガーペインティングの創始者ですから、あるいはご存じかもしれませんが、そのミス・ショーの経験の中でフィンガーペインティングをさせた時のこと、どうしてもやろうとしない子に「先生がお馬になります。あなたはその上にしっかりつかまりなさい」といって自分の手の上に子どもの手をのせたのです。子どもの手が先生の手にのると、「先生のお馬ははやいよ」といってどんどん動かし途中でポンとその子の手を落としたのです。すると何とその子の手はひとりで走っているではありませんか……ということを読んだことがあります。こういうこともあるのかなどと思って早速、ためしてみました。クレヨンをもって先生の馬は、描けない子の手をのせてパカパカ走る。途中ですとんと落としてもクレヨンだからだめです。それで、「あー疲れちゃった。ずるいよ先生ばかりお馬じゃあ、こんどは君がお馬になれよ」といったのです。そうしたら素直に聞いて、こんどはその子が馬になり、私が上にのりました。あれっと思ってみていたら、その子、ひとりでグルグル線を描いているので、その時からその子は絵を描くようになりました。

このように人の書いたり言ったりしたことをやってみると、思

わぬところで解決することがあるものです。それで脳の話に戻るわけですが、脳というものがどういうものかはじめてわかってびっくりしました。頭が大きいからあの人の頭いいらしい、なんていいますが、実際に日本の男の頭の重さは、一、四〇〇グラムで、女の人は、一、二五〇グラムだそうですから、一五〇グラムばかり少ないわけです。そうすると男の人の方が頭がいいのかというとそうではない、そんなこと関係ないのです。自分の身長に八・五をかけると脳の重さがでるそうです。また、よく脳のしわのことが問題になりますが、どうしてしわになるかというと、脳をひろげてみると新聞をひろげた広さに近い面積なのだそうです。

あれだけのものを頭の中に入れられないのでアコーディオンスカートみたいに縮めて入れておくわけです。また脳が重いから優秀というのなら身長の高い人の方がよいということになります。そうすると入学試験なんてたちまちなくなってしまいます。だって背の高い人からとっていけばよいのですから。ところでその脳の話を聞いてたいへん驚いたことに人間にだけしかないようなことがあるのです。脳幹のまわりに古い皮質と新しい皮質があるのですが、古い皮質は動物にちゃんとあり、本能を司る。ところが新しい皮質は高等動物にしかない。一番人間が発達しているのは新しい皮質で、ここは物事を考えたり、つくりだしたりするのに非常に大切なところです。ここはちょうどわれわれがラジオをひっくり返してみるといろいろな線がからみあっているのと同じです。このようにからみあってくるのが、脳の発達だというわけです。つまり脳が発達してくるということは、細胞がどんどんからみあってくることなのです。

脳が発達してくるには三つの段階があります。この三つの段階というところに幼児の教育というものが非常に重要なものだということをきめるだいじなかぎがあるのです。最初に、生まれてからどんどん発達して第一段階というのは三歳頃だといわれます。その次にやる気がでたりする、みなさんが非常に手をやいていらっしゃる五歳から七歳が第二番目の発達段階です。次は十歳頃でそこで基本的なからみあいがだいたいできあがるわけです。あとは二十歳頃までのろのろとからみあって完成するというわけです。それでこの三歳頃というのは教えられたことがびしっと身につくので、この時人間の基本的な配線をちゃんと教えておかねばなりません。それから五、六歳になるとこのころは非常にやる気がでてくるし、自分の考えで脳細胞をからませていく。僕はいやだ、私は好きなどがはっきりしてくる頃だからそのやる気を育てなければなりません。三歳までの間で最初のラジオの受信機みたいな基本的なことをしておかないと人間にはならなくなるでしょう。

前にお話しした「アベロンの野生児」などは、このしくみが人間の型からはずれてしまっているから、それを人間に直そうと思ってもなかなか直らない。その前には、狼に育てられたインドのふたりの少女の話もありますね。狼のお乳で育てられ、狼の配線に

なっているので、それを人間の世界につれてきてもなかなか人間らしくならないのです。何とか一生懸命育てようとすると、かみついたりします。だから人間の子どももそのような所で育てられればいつでも狼になるのです。アベロンの野生児で非常に有効だったことは体をなでてやったということです。マッサージということが非常に効果的だったのです。しかし嵐になったりすると窓から外をみて笑ったりしている。なかなか泣かない。泣くということは人間の特技らしいです。このアベロンの野生児が女の先生に非常にだいじに可愛がられ毎日マッサージしてもらい、その先生と離れる時に始めて、ポロポロと涙を流したということです。着物を着せようとすることにもずいぶん苦心します。だいたい着物などもかみ破ってしまうでしょう。だからいつでもぬるま湯のお湯に入れてやって寒い暑いを骨でわからせ着物を着ることを教えてやったそうです。スキンシップ——皮膚や頭をなでてやるということ——は人間だけでなくあらゆる動物でも非常に効果的な方法だということです。人間の子どもも同じです。

よくどうしたら絵をのばすことができるかと質問されますが、最も基本的なことは誉めてやることです。しかし誉め方があるのです。〝誉める時は頭の髪の毛をかきむしって誉めなさい。叱る時はからだをしっかり抱いて叱りなさい〟ということをいった先生がいますが、けだし名言でしょう。このような心が通じあった誉め方が必要なのです。ところでまた脳の話になりますが、人間のだいじなところというのは、頭の前の方にあるのです。頭の一番後の座は、情報の座と時実先生はいっています。ところが前の前頭前野といわれるところは、学問が進まない間は何を司るところだかわからなかった。前頭葉といわれているところは、山羊やカンガルーなどの他の動物にはなく猿に少しついている程度です。人間しかないものといって人間を人体解剖で調べるわけにはいかず、非常に研究が遅れたというのです。

そこで問題はさっき三歳で一応の配線ができて、五歳で非常に独創的なものができてというふうに話ししましたが、あの場合にも三歳で育つというのは、後の情報の座（または知能の座）が発達するのだということです。ところが五歳くらいになって、僕はこうだな、こうやったらおもしろいなどいろいろなことを考えだすのは、前の方の個性の座の方が発達してくるからだというのです。そういわれてみると、なかなかおもしろいものです。

余談になりますが、私の所に男の子がいますが、先日、自動車とぶつかって入院しました。その時病院の医師はどういうことをやるのかといいますと手足をすっとなでます。そして「わかる？」「うんわかる」「こっちは？」それから目の玉の動きを調べます。つまり例の視覚のところを調べています。あるいは先生がここおさえていますから、足を蹴とばして下さいなど運動調節のところを調べています。そのようにずんずん調べていくのが脳のそれぞれの役目を司るしくみの通りに調べるのです。いかに脳というも

のが人間にとってだいじなところかをよくよく教えられました。

これが調べられるようになったのは、前頭葉を切る手術ができてからだそうです。かつて私はその手術をしているところを描くようにたのまれて立ちあったことがあるのです。とてもこわい手術です。前頭葉を切ると無気力でおとなしくなるということがわかってきました。というのはこの前の方(前頭葉)の働きである思考や意図がなくなってしまうからなのでしょう。この前頭葉は、五歳頃発達するのですから、こうしてみると幼児教育というものが非常に重要な位置をしめており、しっかりやらなければならないということが確かめられたことになります。みなさんは大いに胸をはって幼児教育というものをやっていけると思います。

脳のお話をしてきましたが、後の方の情報の座というのは、知覚などを取り扱っている所です。目でみたり、音で聞いたりした情報を取り扱うところです。たとえばこれは食べられるもの、これは食べられないものと判断する。これがはっきりしてない赤ちゃんは停電の時蠟燭をつかもうとする。すると「め！　だめよ」などといわれ、ああこれは食べるものではないのだなあと思うのでしょう。そう考えてくると、この後の情報の座というのは引き出しが一杯ある資料室のようなものです。引き出しの中に聞いたり見たりしたものをしまっておく。それでわかったことを前頭葉に伝え自分の意図のもとに外に表現するのにつかうわけです。だから引き出しにこれは蠟燭です、とかこれはあんパンです、とか知覚したものをしまっておいて、何か必要な時に、さてこれは何だったかなと引き出しをあけてみる。引き出しひとつあけても解決つかないときにあっちの引き出しをあけたり、こっちの引き出しをあけたりして、組み合わせてみる。これとこれとでこういうふうにして組み合わせてみればできるのではないかなというように。もし引き出しにあるものだけで足りない時は、何か新しいものをつけたして、つくり出していきます。このような行為が創造なのです。だから引き出しにないものは想像できないのです。

二、三年前青森で講習会をした時に、沖縄の人が三人参加されました。沖縄の人は、真冬の一月に、はるばると青森の浅虫まで研究会に来たのですが、何といっても外は吹雪です。そして生まれてはじめて雪をみるのです。うれしくてしようがありません。講習会どころでないのです。不用意に外へ飛び出すものですから、青森の先生方に「すぐに凍傷にかかりますよ、ちゃんと防寒具をつけて出なさい」なんて注意されています。一番最後に、あまり雪に感激しているものですから、沖縄の先生方に「どうですか、先生方、雪をみてどう思いました」と聞いてみたら、沖縄の先生方は「はいそれは白蟻の大群みたいでした」と答えました。吹雪というようなものをみて引き出しを一生懸命ひらいてみたのです。そして白蟻の大群、あれにそっくりだなあという認識をしたわけです。ところが困ったことに青森の先生方は白蟻の大群を見たことがない。そこで「あの白蟻の大群というのはどういうので

すか？」ときくわけです。私は司会をしていたものですから「それは吹雪みたいなものですよ」と答えたのです。なぜかというと青森の先生方の引き出しには吹雪が入っているわけですから、それでもって白蟻を説明する以外ないのです。このようにして引き出しというものは使っていくものです。

また余談になりますが沖縄の人がこんなこともいいました。「あの雪というものはどんなところでも同じ高さに満遍無く降るものなのですね」雪国の人からみれば、それはことき わめてあたり前のことなのですが、どうしてそんなことをいうのかときいたら、畑の中に竹が一本さしてあり、その竹の上にもやっぱり十㌢なら十㌢だけ積もっていたというのです。私はなるほどと感心させられました。

教育というものは子どもたちに雪のように満遍無く愛情が注ぎ込まれるものでなければいけません。しばしば絵画製作の場合は満遍なくではなくて、数人の子どもがたいへん創造的な絵を描いていると先生はにこにこして誉めますが、五、六人の子どもが描けなかったり、粘土活動をしている時ならおだんご作りの子などは駄目ねあの子はなどといい、それですましているというようなことが多分にありますね。沖縄の先生の雪の話のように絵画製作の指導でも、どの子もみんな描けたり作ったりできるようにしてやるということがだいじなことです。

最近、私はたいへんびっくりしたことがあります。宮崎で全国大会がありました。私は保育所の子どもの指導をみました。そこでは二歳の子どもが製作しています。指導案を見ますと金槌で釘うちをさせるとあります。まだおぎゃーと生まれてから二年地球が太陽のまわりを二回しかまわっていない子どもたちに、そんなことができるはずがない。いざ始まってみるとまだおむつのとれないような子どもたちがちょこちょこ来て、発泡スチロールの箱に釘を打つわけです。にこにこしてやっています。そしてよくみると後をひっくり返して釘のでたところが気にくわないのでしょうか、釘をおしもどしています。驚きましたね。私はその時のノートに「ここに人間がいる。人間がいる」と書いてあります。人間の子どもとチンパンジーと一緒に育てた実験例で、一年ぐらいではとてもチンパンジーにかないませんが、満二年に近づくとが然引き離してしまうということが本に書いてありますが、人間というのは、本当にすごい動物だなと思います。また宮崎の二歳児ですが、ハサミをつかっている子どもがいました。左手でじょうずに紙をきっているのです。すると、ついている先生の一人が「あの子左手ね」というのでそばにいって右手に直してやりました。するとその子は困ったような顔をしていました。やがて先生がいなくなるとまたすぐ左手で嬉しそうに切っておりました。

6　今日の美術教育の考え方

さて、この美術の指導といっても今日いくつかの考え方があり

ます。保育の現場の中で、できるだけ子どもの心や描き方、つくり方を尊重してやり、内にもっている力を伸ばしてやり、なるべくどの子どもたちもよろこんで活動できるように、あまり干渉しないでやる方法があります。ヨーロッパのほとんどの国は、そういう極めて自由な方法が行なわれています。みなさん方の大部分の人が、おそらくそういうふうにしていらっしゃるのではないかと思います。

ところがみなさんの中には自由に描きなさいというねらいだけでいいものだろうか、それで力の積みあげになるだろうか、表現力をつけるためには、やはり観察をさせ、また言葉のやりとりをさかんにとり入れてやる、そして線の描き方とか色のぬり方など基本的なことをしっかり教えておく必要がある、というような考え方もあります。それらを考えてみると自由にのびのびと描きなさいという方法は、できるだけ、子どものやる気を励ましていこうというやり方で、五歳の頃に発達するという前の方（前頭前野）に非常に重きをおいた考え方だと思います。確かに生き生きとしている子どもは創造的でもあります。次に後者の方法というのは普通の子どもは魚を描くといったらみんな定まった八の字形に描きます。これが小学校の二、三年生になっても「あ！　魚、魚は八の字」などと描いている。自由にというだけでは、このように一向に伸びないのではないかという問題があるわけです。だから好きなように自由にやりなさいということはよくわかるのですが、絵画製作というものであるならば、教える方法や造形の手だてというものがあるわけです。

だいたいひき出しの箱の中味を充実させなければなりません。魚でも実際に目の前においたりさわったりして描いた魚は全然ちがいます。そういうふうにして情報の座を大いに増やしていかないと想像や創造というものは生まれてこない。それからむずかしいことに絵には自分の感動とか、解ったことを外に表わすのにひとつの翻訳というものがあるわけです。「こういう大きな犬が来てね」などという時、犬という立体のものを紙という平面に描くわけです。このことはものとものの重なりや空間のひろがりの表わし方についてもいえます。ここでむずかしくなってくるわけです。そこでどうわからせたらよいかという教育が、相当にみなおされてきたのです。ところがなんでもそうなのですが、「そう、じゃあ教えればいいのね」というと脳細胞のからみあいの発達などおかまいなく一足とびに上の方に到達するような教え方になるのです。たとえば子どもの興味や感動と何のかかわりもないバケツを正しく描かせたりすることになりかねません。かつて日本の教育はこれで失敗したのです。

ですから教える教育というものにも、大分問題点があるわけです。早目に何でも教えておけばよいという、非常に行きすぎたことにもなります。しかしこれをだいじにしようとすることは脳のしくみからもよくわかることだと思います。実際の物をみせると

いうことや、話し合いということが、だいじになってくるでしょう。それについてなるほどうまいなあという指導を、ゴム風船の指導でみたことがあります。それは色には濃い色と薄い色があるという指導なのですが、普通そんな時には、画用紙にマス目を作って、クレヨンで薄い色から次第に濃い色を順々にぬらせるようなことが考えられます。これではまるで中学一年のグラデーションの学習みたいです。これではあまりに冷たすぎませんか。何か色の変化についての驚きや、必然性というものがなければ指導は生きてきません。その先生はみどり色のゴム風船のしぼんでいる時の色をみせ、次にそれに息を入れるとすこし薄くなる。もっと大きくしてみましょうね、といってもっとふくらます。こんなにするともっと薄いみどり色になる。そういう実際の物の変化をみせて水えのぐで描かせている。これなど子どもと心のつながりがあるし非常に暖かい指導で、遊びの中でごく自然に薄い色と濃い色ということも気づかせているうまい指導だなあと思いました。こういうような指導が本当はいろいろと考えられてこなければならないと思います。

よく絵画製作の方では三つの輪にかみ合っている図を使いますが、絵でも製作でも手と心と頭とが三つかみ合わされて表現になっているわけです。これもよく考えてみると、手は頭頂部の運動の所、頭というのはこの場合知能をいっているのでしょうから頭のうしろ、心は前の方の前頭前野ということになります。それでこういう手の基礎訓練をだいじにするという教育方法は頭の頂上へんの運動を司る所を大切にした論です。

このように幼児の絵画製作の指導といっても、考え方があり、それぞれのねらいとしているところがあるわけです。

いずれの立場をとるにせよ、基本的にはまずこのやる気をもり立てなければいけないのではないでしょうか。前頭前野は個性の座とか情報の座ともいわれています。やる気が情操と密接に関係をもつようにするのが絵画製作の仕事です。ところが人の心はたいへん微妙なものです。これをリラックスさせるということです。

7　リラックスと表現

幼児の絵で精神のリラックスがいかに大切かその一例をこれからおみせします。それは先日朝日新聞にも書きましたので、あるいは見た方もあるかも知れません。これは私にとっていろいろなことを教えてくれたものですから、みなさんも何かお役に立つかも知れません。

ある日のこと幼稚園の子どもがすぐ前にある小学校の教官室に入って来たのです。私はその十分間のお休みにタバコをのみに教官室にいたのです。そうしたら三、四歳位の可愛い子がちょこちょこ入って来たのですがあの子は誰先生の坊やだろうとみていたのです。そうしたらその子のお母さんは算数の先生なのです。その十分間のお休みに、一生懸命採点をしていたので子どもに応

対している暇がないのです。坊やは最初あたりをきょろきょろして不安そうです。一番頼りにしていたお母さんは言葉をかけてくれないし、どうしてよいかわからずお母さんの引き出しをあけてみたら赤いマジックがあったのです。それをみつけたものですからそれで何かにいたずらをはじめました。そばにつんである画用紙に何か点点をかいていました。何だかふんいきの重苦しい教官室、先生方はみんな見ている。子ども心にもどうしていいかわからない、何とか逃げだしたい気持なのでしょう。一番目の絵はいかにも抵抗をしめしている。はげしい直線的なギザギザの線の絵でした。

このざくざくと無数にうつった点というのは、実によくその時の心をあらわしているような気がします。私どものジェスチュアでもいやな時は直線的になります。そしてまた、この子は二枚目を描いています。今度は大分よくなりました。前のように無数の点はありません。なんだこの画用紙に描いてもいいのかというような気持もあるのでしょう。それにしても決してふつうの線ではありません。やはりいやだ、どうにかしてくれという感じです。このとき、お母さんははじめて坊やに目をむけ言葉をかけてくれました。「あら坊やお絵かきしているの、お絵かきするのならあそこの広い所へいらっしゃい」といって画用紙を数枚もってその子の頭をなでながら真中の机につれていきました。ところがその広い机と私のいた場所とはすぐ近いのです。だからよくみえました。「坊やは上手なんだね何でもかくの？」と声をかけてやると「うん」なんていっています。それで三枚目にかいたのがこれです。非常になだらかな曲線になってきました。でもこの時私は「何描いてるの？」と聞きましたら「みち」と答えてくれました。本当はこういう質問はよくありません。「先生にお話してちょうだい」というのがよい質問です。何描いてるのというのではその絵が何だかわからないことになるからです。

そういうことを知っていたけれどその時はそういうふうにいったのです。三枚目をかいて「へえーすごいんだなあ坊やは」なんていわれると子どもはもっと描くなんていって描いています。そこではじめて具象的なものがあらわれます。それは四枚目の絵です。これは何にみえますか？　これは象なのです。丸でお耳をかいて鼻とまつげがとてもながい。ところが象の鼻をみてみると、マジックインクというのは大変便利なものです。なぜかというと「こうかなあ」などと手を止めているとそこの所がにじんじゃうのでためらいがよくわかります。

この鼻をみていると非常にとまどいながら描いています。そしたら坊やは「あれ、失敗しちゃった！」というのです。「どうして失敗なの？」「あのお耳三つになっちゃった！」それはなぜかというと、子どもははじめ何かわからない線を描くことからはじまります。そのうちそれを統御することができてくるわけです。上の方に描こうとおもえばそのように手がいうことをきくように

なるのです。このまるを描くということを覚えると子どもはなんでもまるで描いてしまいます。のこぎりの歯のようなものまでまるくかく始末です。このまるが描けるものですから調子にのって耳が三つになっちゃったのでしょう。そうすると失敗のはずかしさでまたまわりのぐにゃぐにゃの線となって表われてきます。

そして最後に描いたのがこの五番目の絵です。左側に象の顔をよせて今度は用心して耳を先に二つ描きました。それで鼻を一気にきゅうーっとひっぱり途中でちゅうちょしていません。この子は描きおわると得意そうに舌なめずりしているのです。私はそれをみてびっくりしました。われわれが創造的な絵とか望ましい絵というのはこういう絵をいっているのです。何とすばらしい絵でしょう。

それで私はその算数の先生にその絵をいただいたわけです。この五枚の絵から私はいろいろなことを知りました。一番最初描いた絵は少し心配な絵です。イライラ、ガチャガチャ闘争的、これは望ましくない絵です。この望ましい絵とこの望ましくない絵を一緒にしてみるとよくわかるのです。しかも十分間の休み時間ですからわずか八分間くらいで描いているのです。どうしてひとりの子がこんなにすばらしくもこんなに困るようにもなるのでしょう。ここの所に人間の非常に複雑な心と表現の問題があります。

この最初の絵はちょうどやどかりが殻の中に逃げこんでいるような状態です。「ママー」といっても返事をしてくれない。みんなこっちをみている。どうしてよいかわからない。助けてくれよという状態です。私どもはしばしば熱心であるというような場合の指導などには案外こういう状態です。どきどきした状態、リラックスしていない状態の時に自分の力を全部出すなんてことはできません。ですから子どもに絵を描かせる場合、描く前によくよく注意して、心を殻の中に入れた状態にしておいて、あとで、どうして創造的な絵を描かないのかしらと嘆いていることがよくあるものです。やはりなんといってもリラックスさせてやる。やる気をおこさせてやることが大切ですから、さき程の誉めなさいということはここで生きてくるわけです。そうするとまたやるかという気がおきてくるのです。私などもまだこの年になってすら誉められれば嬉しいですね。

8　美術教育の心理主義

よく絵画心理主義などということがいわれています。お家の絵をかいて、お父さんがお母さんより小さく描いてあるといって、これはかかあ天下の家だなどというのをきくことがあるでしょう。子どもはまだ大きい小さいの区別が描き表わせないのです。たまたまそういうふうになってしまったのでしょう。ただ一枚の絵をみて、せっかちに判断はできません。人間には非常に調子のよい時と悪い時とがあります。悪いところをとって全面的に人間を評価されたりするのはかないません。そういうところに心理主義の

陥りやすい欠点があるわけです。もっとも子どもの絵の心理というものは大いに勉強してよいことです。

ただし心理主義におぼれて、それのみが絵画製作の目的や仕事だとしてしまうことは危険なことです。むしろ心理はわれわれが絵画製作の指導をするのに都合よく活用すればよいのです。

9　二つの表現領域とその指導

ここで最後にいいたいことは、子どもの造形活動には二つの世界があるのです。私なりの分類の仕方ですがあ表現とん表現の二つです。北原白秋は歌は〝あ〟なりといいました。だいたい絵も〝あ〟なのです。「あ、すごいんだな！」この驚きのない子どもはとても心配です。いきいきしている子どもはいつも驚いています。この〝あ〟が脳の各部の働きを通って表現されるわけです。ところが〝ん〟表現とは、うーんと考える形です。非常に自由な絵という時には〝あ〟をもりたてるようにするわけですが、これはたとえばスリッパをつくってみようなどという時にはよく考えないとつくれません。現場では、この二つがごちゃごちゃに指導されていることが多いのです。例えば粘土で好きなものをつくりましょう。といってつくらせる時は〝あ〟表現にうけとめた子と〝ん〟表現にうけとめた子では作品が違ってくるわけです。ねらいからはどちらでもよいのです。象をつくった子ばかりほめているのは〝あ〟に片寄っています。望ましくないというのは無気力の子、やる気のない子です。だいたい〝あ〟表現という型にみんなは慣れすぎています。〝ん〟表現はなかなか行なわれていません。〝ん〟表現指導の場合は例えば教師は〝うーん〟なんて画用紙をもって考えていると子どもが「先生はやくして、何やるの？」「うん、あのね画用紙でね、東京タワーつくれるかなあ？」なんていっていると子どもはうーんと考えます。こんなやり方から入って〝ん〟表現が育つのです。ところがどちらかというと〝あ〟表現ばかり先生はやっておられる方が多い。〝あ〟表現〝ん〟表現というものがあり、その指導の仕方がちがうのです。そしてそれぞれのやり方で子どもの創造力というのは伸びていくのです。

最後にイギリスの格言に、

一日しあわせであるなら温泉に行けばよい。
一週間楽しみたいなら旅行に行けばよい。
一月楽しみたいなら家をつくればよい。
一生の間楽しんでしあわせでいたいなら、
あなたは誠実で貫くことです。ということばがあります。

幼児の教育、特に絵画製作のことを足もとを確かめ確かめお話ししてきましたが、まだまだ足らない所がたくさんあります。けれどこの最後の言葉の誠実な歩みこそ、私たちの最も大切にしなければならないものだと思います。

（十文字学園短期大学・お茶の水女子大学）

（本稿は幼児教育講習会において講演されたものである。）